ソシュールの言語論・丸山圭三郎を読む
副題：ランガージュの話し手・聴き手の双方向的な駆動を想定した上で
（ソシュールの言語論の解釈のために）

私の視点）１・言語的コミュニュケーションとランガージュ

「言語使用」は、人類の（生命活動＝生活）の中で、命の継続に係わる情報（食糧調達や生命危険危機の情報等）の共有過程と共に、集団的な願望、願い、危機回避、その後の安堵などの場面で生起したであろうと思われ、言語使用の経過こそが、人類の「自然生物性から社会文化性へ」とされる移行過程、その主要な環と重なりうると考えられよう。

その地質学的時間経過において、人類はラング（言語）によるコミュニュケーションを集団的に交わし、ラング（言語）の体系性を言語集団的に浸透させ敷衍させつつ、人類における歴史時間を、集団と共に生活を営む社会文化の状態へと移行したものと考えられよう。

（互いのランガージュ活動の交錯、重なり合いとしての意味理解）

集団内のコミュニュケーション活動とは、語る側と意味を受けとる側の双方の言語理解が前提であろうから、そうした集団レベルの言語使用の積み重ねを必要条件として、言語集団的共通体験、共通の状況（天災地変、自然現象、飢饉など）における、言語表象、音声、叫びといった、集団的なランガージュの駆動状態が想定され、言語音声的な意味表象、その意味理解、言語的意味の共有過程としての言語的コミュニュケーションが想定される。

言語的コミュニュケーション：話し手と聞き手は共にランガージュを駆動して、「シーニョ」を構成する音素配列関係をおいかけつつ、「音響イメージ」を括り出すとして想定される。

音響イメージとして「意味」を抱えている「シーニョ」について、ソシュールやヤコブソンの「シーニョ」の図解を検討すると、外側にある矢印は双方向を向いて描かれているようである。その矢印の双方向性が示している事は、ランガージュの駆動態は、言語的意味と音響イメージの双方向的に動き合う、互いに一体性を成して動く相互性を有し、「音」と「意味」の一体的駆動態として想定されている。（その絆は無意識からの指定とされている。）

※そして「語る主体」の意識から出発したソシュールに対して、音韻論のヤコブソンはコミュニケーションにおける「聞き手の役割を重視する」とされており、「話し手と聞き手という主体が交互に織り成す階層的なコミュニケーションを統一的に捉えようとしていた[1]」とされる。

[1] 朝妻恵里子　ロマン・ヤコブソンのコミュニケーション論：言語の「転位」(hokudai.ac.jp)　p 212

ランガージュの駆動態について、「シーニョ」の（括り出し）の働きについて、その「音」と「意味」の双方向的な矢印が表していることは、言語音声の音素の配列関係の差異を刻々と追いかけつつの、話し手の言語音声の発声作用、聞き手の音響イメージの湧出に繋がる聞き取る聴覚作用、その双方（表象側と意味を聞き分ける側）において重なり合う交互作用、双方向的なランガ―ジュの動きにおいて、音響イメージとのすり合わせ、象徴機能、概念化作用の動き合い、重ね合いを想定できよう。その**双方向的なランガージュの駆動、交叉作用関係としての、言語的コミュニュケーション**を想定する。

私の視点）２．　ホモ・サピエンスへの進化の過程と言語使用

人類の身体性、その実質の変容（脳容量の増大）のベースにある人類の生命活動（生活）、その中での言語能力の駆動、脳機能の駆動の様態について、前述その集団内の個々人は聞き手であり、話し手であり、交錯、重ね合いつつの言語使用、話し手聴き手のランガージュの重ね合い、双方向性が想定される。その重ね合いが母国語集団全構成員において浸透し敷衍する母国集団の歴史経過を必要条件として、人類の身体性、その実質の変容過程（大脳容量の増大）、人類の進化過程が想定されよう。

そして集団的に言語が使用され流通されるが故に、ラングの体系性の変容が起こり得るのであり、母国語集団的な、言語の体系の変換過程、通時、共時の変換の経過は、人類の身体性という実質の変容（脳容量の増大）をもたらすところの言語使用の展開課程として想定されよう。人類の身体性という実質の変容（脳容量の増大・二足歩行の安定へ）は、言語体系の変換過程、その重合拡大と共に引き続き得たと考えられよう。

※言語的コミュニュケーションに係わる語り手と話し手の交互作用関係、聞き手においても同質の「ランガージュ」の駆動を想定し、ランガージュが言語表象側、聞き手側双方において駆動、関与して、双方が互いに重なり合わせるランガージュの動態を想定する。

話し手の精神機能が恣意、自由にラング内の「シーニョ」を選びつつ進め、その場で同時に発語上の拘束性（線状性）によって限定される言語音表象、そうした言語音声（パロール）であり、それは「シーニョ」を構成する「音素の 12 対の示差標識」で構成される音素の集合、線状的な配列関係、その音響イメージを体現、あるいは湧出するパロールと理解される。「シーニョ」における音素配列関係、言語的意味の単位として、「意味」と「音」の一体的なつながりを抱えるところの「第一の恣意性」を駆動しつつ、話し手は、その「シーニョ」のシニフィーエ（意味）の側からシニフィアン（音）につなぎ、かつ線状性に拘束されつつ結合を進めている。

聴き手においてはアモルフ、連続的に響く外界の音響刺激から言語音声を、さらには言語音声を「音素の 12 対の示差標識の配列集合」として、シーニョの音響を刻々と聞き分け、その音声（シニフィアン）を意味（シニフィーエ）につなぐ「第一の恣意性」において、そ

のランガージュの機能において、それは象徴機能としての全方位的な展開（恣意性）を線状性の拘束下で連ねる「シーニョ」の流れだが、その音響イメージを湧出、聞き取る動態であろう。

「パロール」が聞き手にメッセージとして繋がれていく経過としては、バロールの流れを聞きわける側、表象する側双方の、言語音声の単位「音素の 12 対の示差標識」を構成する音素の線状的な配列関係のサーベイ、追跡という動態が想定される。

言語音の表象過程、聴取過程、その言語的コミュニュケーション過程は、話し手においても、聴き手においても、音素配列としての「シーニョ」のシニフィアン（音声）を、「12 対の視差標識」で構成される各音素の配列関係をもって、「意味」の側からの発語、「音」の側からの意味理解として、双方向からサーベイする過程、音響イメージの湧出と発語運動のへの連動として想定される。「シーニョ」の音素配列がもたらす音響イメージを聞き分ける聞き手、「音響イメージ」から音素配列関係へと発語するランガージュの駆動が想定される。

話し手、聞き手の言語使用、「ランガージュ」の交錯関係、その母国語集団全体をカバーする言語使用としてのコミュニュケーション過程は、ランガージュの双方向的な駆動の、地質学的な歴史的時間経過において、「シーニョ」の「音」と「意味」の絆を集団的に構築し、ラング（言語）の体系を集団的に構築し、その経過において、人類の身体性、大脳量容量の増大、種の分化過程へ、人類の身体性（実質）の変容へと至り得たものとして想定されよう。

私の視点）3. 集団表象と個人表象の間

言語使用の古い時代を想定するということは、パリの言語学会が禁止したような議論なのだが、古い時代の人類においては、集団表象と個人表象は一体的、混然一体であろうから、たとえば、一定の集団を成して移動する哺乳類にあっては、叫びなりは集団表象としてあり、しかしながら同時に個的な表象がその中に埋没しているとも言えよう。この二つの側面、集団表象と個的表象の重なり合いにおいて、古い時代においてその互いの境界性は、曖昧であり、あるいはいまだ境界性が気付かれておらず、個人表象を想定し得ない時代経過、**地質学的時間の経過があり得たとも言えよう。**

そして、集団表象と個人表象の間に、ある境界が気付かれ、浮上しつつの時間経過を経つつ、集団と個人の間の相互関係において、個人は浮かび上がりつつ、そして文字文化の到来を経て、近代的自我作用が議論されると言う展開が我々人類の歴史経過であろうか。その時空において、我々は言語について考察しているという現在ではないだろうか。

古い遠い時代においては、言語主体の言語表象する意識は、個体的な意思活動でありつつ、その心性はより生物性（自己増殖と自己複製、或いは生物としての安らぎ、危機への緊張・弛緩など）に傾いており、それぞれの言語表出する個々の人間は、自然生物性に覆われ、個

人表象と集団表象の境界は曖昧、個人意識は集団意識と一体的に展開していると思われる。（人類は 20 万年前から、ミトコンドリア・イブは、約 16±4 万年前とする仮説であり、クロマニヨン人は 2 万数千年前に絶滅したと言われる。）

人類の集団表象と個人表象の境界はあいまいな歴史時間を永く経過したと思われ、それぞれの言語主体の自意識としては、近代人において想定されている自我意識というよりは、**集団的な状況、渇きや飢えをきたし、或いは身体損傷などを引き起こす天災への遭遇などの集団的な危機の中の恐怖、恐れ、その弛緩と言った集団状況における、叫びなどが、音声表象として、共有される集団的経過と一体的として想定されよう。**

それは個人と集団が一体的であった長き太古の歴史時間において、個人表象と集団表象の一体性の中で構築され始めた人類の音声表象が、言語能力として、集団的な言語使用として、次第にコミュニュケーション過程が蓄積されると言った、言語主体と意味を受け取る側の双方の動きを経つつ、その経過の中で構築された言語の体系であろうと思われる。個人の表意活動と受意活動における、集団と個の間の境界への気付き、集団意識と自己意識のズレこみ、差異への気付きの発生、個人と集団の間の齟齬や揺らぎ、その重なりの中で、集団内他者への気付き、自己と自集団の差異への気付きとは、同調的得あろうと思われる。

言語を表象する意識、言語の意味を受け取る意識、表意活動と受意活動の一体性は、受け取る側の意識としては、意味の括り出しを重ね合わせ、再構築し合うと言った、言語の意味理解であろう。言語的意味を表象する側の指向性を抱えつつ、意味を受け取る側の「シーニョ」を重ねつつ、言語の意味は揺るぎあうと言った言語のコミュニケーションの構造が想定されるえあろう。この意味の共有、意味の重ね合わせについては、現代思想における、諸潮流、クリスティヴァにおける、間主観性などの議論とは、重なっているといえよう。

私の視点）４．「実体概念から関係概念へ」の意味合い

19 世紀末葉の世界にあって、近代科学が勃興し、神の作りたもうた、もろもろの自然現象、対象世界、現前の事実、実体に対峙して、近代的自我作用は、冷静かつ科学的に対象把握、解明を進めるという、科学的思考への圧倒的な信頼の時代が訪れた。その真っただ中にあって、言語的意味は「二項対立する差異の関係」から括り出すところの、己を取り巻く生活世界の解釈の様式として、差異への感興、その解釈、それぞれの差異関係、それらを意味の網の目と形容するラング（言語）の体系が示され、その変換過程を想定するソシュールの言語論が展開している。

ソシュールの言語論において、言語の意味はある差異に気付く人間の観念作用、その差異への気付き、いわば感興を、「ひとつの二項対立」の関係として、生活世界の解釈の構図、「差異の二項対立関係」を構成して括りだす想念、あるいは観念性としての「音響イメージ」

と理解される。それら「音響イメージ」と繋がる言語の意味、その単位が「シーニョ」といえよう。それは「音と意味」が一体的に繋がり、音素はその構成単位である 12 対の示差標識から構成される、音素の組み合わせ集合、配列関係としての「記号的な単位」であり、「無意識からの指定あるのみ」とされる恣意なる絆において、言語的な意味を抱えているとされる。

さらに、「シーニョ」を格納するとされるラングは、各「シーニョ」を類推的な秩序（連合の軸）で格納する「宝庫」とされ、その体系は「シーニョ」間の関係の網の目という表現である。「無意識のうちにはたらく、差異のみからなる体系」である言語の体系は、「シーニョ」の格納庫であり、人間の音声表象が「音響イメージ」として聞き取られる意味の単位、それぞれの言語の意味を抱えており、それら「シーニョ」間の差異の構造を持って体系化されている。この体系は人間の言語表出時の、恣意性と線状性の葛藤の中で音声の変容を引き起こした場合には、聴き手側の「差異の二項対立関係」を揺らすこともあり得て、「シーニョ」の格納庫としての言語体系を変換せしめつつ、バロールの実践課程、ディスクール（言述）を形成するものと理解される。**言語的意味は、言語使用の中で言語音声の揺らぎがあれば、揺らぐ場面があり得て、それが言語の変換を引きおこし、それらは恣意、自由に展開可能な人間の意識作用が構成する「差異の二項対立関係」によるという、非実体性が示されている。**

私の視点）５．意識に届くについて（意識に届くとは？）

「世界が分節されると同時に、自分の意識も分節される、また自分の意識が分節されると同時に世界が差異化される[2]」と説明されている人間の意識作用、未分節未分化であった世界を差異化し、解釈を括りだすランガージュの駆動、そうした言語的意味の創出過程を、ソシュールは「意識に届く」としていると理解される。たとえば私は「差異の感興」と表現する心的動態がそれなのだが、ソシュールは**「世界が分節されると同時に自らの意識もまた分節される」との表現において、自らの生活世界の中の、ひとつの「解釈に至る経過」「言語的意味の創出の過程」を示し出していると理解される。（第一の恣意性）**

「ランガージュによる言語外現実の一つの解釈であり、差異化です[3]」とするランガージュの駆動態、「差異の二項対立関係」の構成をもってする解釈の形式が、大脳神経伝達反応として成立し、意識上の類推的な心的動態として、「意識が知覚するものは常にａとｂの間の差異でしかないと言う理由からである。[4]」とされる流れ、そうした反応、あるいはその動態についてを、「意識に届く」として表現にされていると理解されよう。

---

[2] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P46　岩波セミナーブックス 2009 年 3 月 13 日
[3] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P45　岩波セミナーブックス 2009 年 3 月 13 日
[4] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P167　岩波セミナーブックス 2009 年 3 月 13 日

・意識の上での類推的変化（関与的変化）＝変化前の伝承形と**新形が共存**[5]
・意識の下での音声変化（非関与変化）＝変化前の伝承系は消え**新形に置き換わる**

言語の体系を意識内、或いは脳内に抱えつつ、集団的なルール・規制の中で生を営む社会文化の状態、社会生活を営む人類において、その言語駆動に係る心的構造は連辞（線状性に従う）と連合（恣意性に従う）の軸の二筋であり、恣意性をもって「シーニョ」を選びとり、線状性をもってバロール（言語音声）を連ねつつ、言語的意味を分節（括り出し）しつつ、ディスクール（書かれた事、言われた事、言述）の実践を進めるとして理解される。その言語表象の場での、意識上の類推的な選択、あらたな「差異の二項対立関」の創出、その心的動態を「意識に届く」という表現としていると理解される。

人間の意識が、自らの指向を、一つの「二項対立関係、差異の関係」を構成して括り出すところの意味を抱えた音響イメージ、その形式で括り出す「シーニョ」であり、その括り出す差異の感興は「差異の二項対立」という形式で on/off に対応する形式をもって、おそらくは脳機能の神経伝達物質の大脳言語野への到達によって、脳機能・あるいは心的に捕捉された状態へと移行する、その様態が「意識に届く」と言う表現になるとして理解される。

（アナグラムの諸相は、そこに至るまでの「シーニョ」を構成する各音素配列関係の定着過程として想定され得ると思われた。）

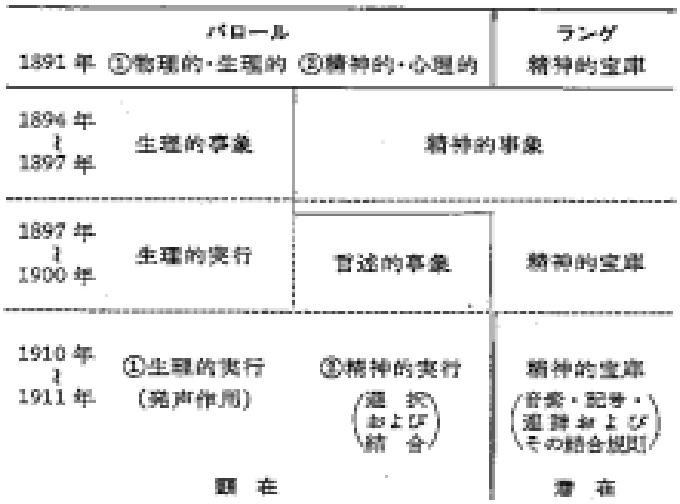
私の視点）６．丸山圭三郎の『ソシュールの思想』P87 :ラングとバロールの働きについて
人間の意識、無意識の複層性

※ｐ168「我々が語るのは、連辞によってのみである。そのメカニズムは恐らく、我々が連辞の型を頭脳の中に持っていて、それらの型を用いる時に連合語群を介入させているのである。（・・・・・）それぞれの連合軍の内部で何を変えれば単位を差異化し得るかということを、我々は知っている。だから、連辞が作り出される瞬間には連合群が介入しているのであって、連合群なしには連辞は形成されないと言えるのである。[6]」として言語表象が説明され、**連合・連辞の軸は相互関連的に重なり合いながらの音声言語表象過程が示される。**

【ソシュールは晩年（1910 年）になってから、この双方（①物理的・生理的　②精神的・心理的）を共にバロールの機能として組み入れている。しかしそれ以前は、①をバロールに②をラングに分けており、この変化は、人間の意識上とされる精神機能である類推作用（**恣意性**）と、意識下とされる言語音発声運動上の制約に対応する**線状性**、その葛藤状態を想定している。そのソシュールにおいて、「シーニョ」のシニフィアン・シニフィーエの絆（第

[5] 丸山圭三郎　『ソシュール』を読む P87 岩波セミナーブックス２　2009 年 3 月 13 日
[6] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P168　岩波セミナーブックス 2009 年 3 月 13 日

一の恣意性）は、恣意でありながら「無意識からの指定」＝（意識下）とされ、第二の恣意性とされる言語表象時の各「シーニョ」を刻々と選び取る精神機能については、意識上としている。従って「恣意性」とされた精神機能の動態は、意識の上と下の双方で駆動し、それらをパロールの機能としている。】



「ソシュールのラングとパロールの概念をめぐる思考の流れ」の図（p 87・ p 334）

この変化は、人間の言語を繰る意識の中の恣意性なる展開課程は、意識の上と意識の下（無意識）の双方において発動される（第一の恣意性は意識下・第二の恣意性は意識上）との動きであり、線状性に関しては、言語音発声という身体活動からの要請として意識下（無意識）の要請とされており、そして発声上の規律である「辞項」の形成には、習慣的な無意識的秩序（線状性）として進むとして理解される。

線状性からの要請、その習慣性獲得、発語上の規律としての線状性は、意識下も含めて言語表象時の双方（線状性と恣意性）が同時駆動する、その重なり合って進む様態を前提にして、その双方（選択と結合）を共にバロールの範疇にいれる所へと、晩年のソシュールはうごかし、バロールの機能を拡大する方向での変化を示している。

この事は人間意識内の無意識の階層性が示されており、ラングについては脳内、或いは心的な体系として潜在的であるところ、その体系の顕現としてのバロール、言語音声の発声に係わる場面で、意識的か無意識的かと言った二律背反的な構成ではなく、精神機能の重層性が示されていると読み取れると思われる。

この図が示している事は、ソシュールの言語論は、ラングの解明の最後において、バロールの実践こそが、言語の体系性を、動態的・社会構築的な言語使用の姿としての理解における幹であり、ランガージュの駆動態、言語の体系の構築過程において、人類の言語使用における焦点としてのバロール、その在り様についての逡巡ともいえようか。

人間の言語能力（ランガージュ）はラングの体系に規律されつつ、バロール活動として「シーニョ」の連鎖としての発語において言語使用を進めている。その場での人間の精神構造は複層的（意識上・下）であり、言語の線状性は身体運動を統御しつつ、無意識（意識下）的・生理的実行の範疇とされておりながら、もう一方の精神機能、類推的に次に発語すべき「シーニョ」を選び取る機能の発動の場、恣意的に展開する意識上の作用とされている精神機能を拘束しつつ、連動しつつ、「シーニョ」の結合を習慣的に進めつつ、線状性の要請において、意識下・意識上の精神機能の重なり合いの中でバロールを繰り出し続けている。

この複雑系的な議論からは、ソシュールにおいては、フロイドの無意識以前の人であり（フロイドの１才年下のソシュール）、意識的、無意識的と言う括り方ではなく、人間の精神機能の複層性を前提にした議論といえよう。アナグラム研究におけるパスコリへの質問から伺えるのは、無意識と意識上について、緩やかな階層性が前提にされていて、浅い無意識の意識化を問いかけているとも理解される。

そして文字言語は、時間性、空間性を越えて、言語表象を記録、伝える事ができる形式である。したがって言語表象者と聴き手側の間には、多様な時代状況を背負い、時空を超えて、読者の意識、解釈が入り得るといえよう。さらに文字言語の表象は時空を超えての呼びかけとして成立し、複数回にわたり答える事、反芻する事が可能なコミュニュケーション過程が現出したといえるであろう。

話者と聞き手の言語情報の交換過程、音声言語とは違った書き言葉、読者の存在自体が時空を超えて、意味をうけとりつつ、応答するところから、それぞれのディスクールは、ランガージュの活動態として、人類史的重層性を体現する方向へと向かわざるを得ないと思われる。文字言語の開いた人類の社会文化性へ移行の地平、そのインパクトは大きいと言わざるを得ない。（2022/0804）